



「最大名」や「アブドル・バハの^{しやしん}写真」は祭壇に飾るくらい大事に扱^{だいじ}うよう細心^{さいしん}の注意^{ちゆうい}を払^{はら}うこと

ひるの星

No. 265

もくじ

アブドル・バハの ^{ことば} 言葉2
アブドル・バハ3
クイズ8
ぬり ^え 絵9
ステンド・グラスの ^{ほし} 星10
みんなの ^{しやしん} 写真11
保護者 ^{ほごしや} のページ12



バハイであるということは、
ただ、

せかい 世界のすべてを愛し、
あい

じんるい 人類を愛すること、
あい

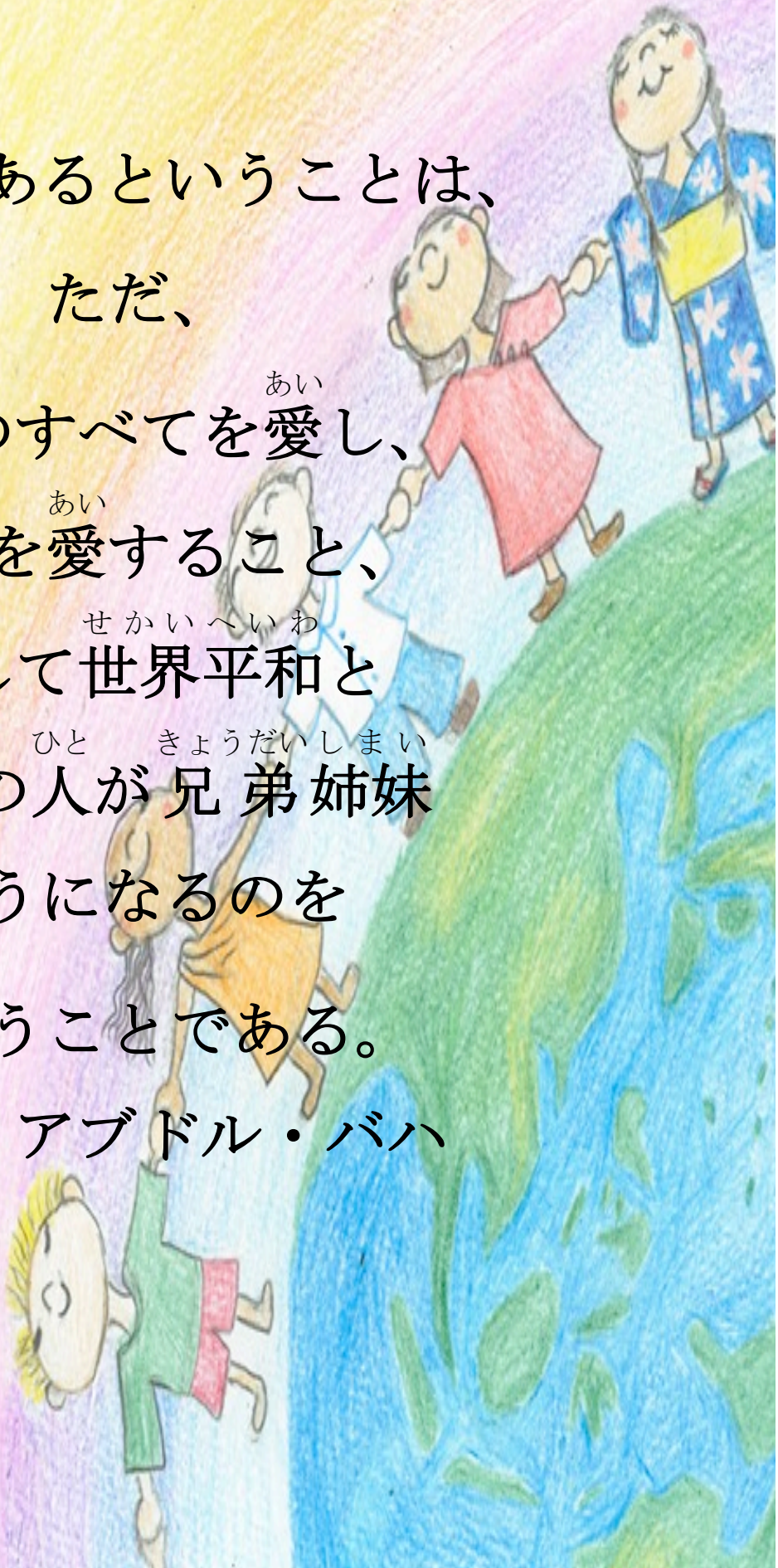
せかいへいわ そして世界平和と

せかい 世界の人々が兄弟姉妹
ひと きょうだいしまい

のようになるのを

てっだ 手伝うことである。

アブドル・バハ



アブドル・バハ

沖縄の月曜日の午後、平原家の子どもたちが学校から帰って来ました。アスマだけ姿を現さないで、お母さんは心配になってきました。それでリアズにどうしたのか聞きました。リアズは返事に困ったように床に目をやりながら答えました。

「アスマはけんかに巻き込まれたかも知れないんだ。」

「それは、どういうこと！アスマらしくないわね。」とお

母さんが驚いて叫びました。

宿題をしていたモナが、「そうよね！リアズだったら、分かるけど」と続けました。ちょうどそのとき、玄関のドアが開く音がしました。お母さんが急いで玄関に向かうと、アスマがびっこを引きながら自分の部屋に向かって行くのが見えました。

「アスマ！どうしたの！？」お母さんが心配そうに声を上げて聞きました。子どもたちも、みんな、お母さんに続いてやって来て、アスマの様子をうかがいました。

「おれも、わけが分かんないんだ。。。。校門を出たところで、おれの知らない、おれより大きい男の子たちが、いきなり跳びかかってきて殴ったり蹴ったりしたんだ。そして、その中の一人が弟を今度いじめたら承知しないぞと捨てぜりふをして逃げたんだ。」

すると、リアズが「あれ、そうか。。。。友だちが言ってたけど、そいつらがおれを攫していたんだ。そして、アスマとおれを間違えたんだ。」と、ボソボソ言いました。みんな、リアズの方に目をやりました。

「リアズ、それはどういうことなの？」モナが切り出しました。

「えーと。。おれのクラスで本当にいらつく奴がいるんだ。そいつは先生の気を惹こうとして、みんなの告げ口をするんだ。」

「特に、あんたのことを告げ口するんでしょう？だからよね、リアズ！」シャラが付け加えました。

「そうだよ。だから今日はそいつを思い知らせてやることにしたんだ。そいつが自分の兄きに言いつけて、おれをやっつけてもらおうと言ったんだ。でも、おれは、かかって来い！怖くなんかねえー！と言ってやったんだ。」リアズが強がって言いました。

「たぶん、そいつの兄きが平原というのはどいつだと聞いたら、誰かがアスマを指さしたんだと思う。」と言ってリアズは足下を見ながら「ご免、アスマ。」とあやまりました。シャラが跳び上がって言いました、「ようし、みんな！明日、放課後そいつらを待ち伏せして、やっつけようよ！」

「シャラ！何ということ、この子は！」お母さんがたしなめながら、「みんな、こっちに乘なさい！」と言って畳の部屋に呼びました。みんなはお母さんを囲んで座りました。



「アスマは本当に気の毒だったわね。こういうときアブドル・バハだったらどうしたでしょうね？アブドル・バハが私達のお手本だとバハオラが言われているのをみんなは知っているわね？実は、アスマに起きたようなことがアブドル・バハにもあったのよ。その話をしてみようかしら？」みんな喜んで首を縦に振りました。興味津々でした。



「アブドル・バハがまだ幼い子どもの頃、住んでいたイランの首都テヘランには、迫害されているバブの信者のバビ教徒がたくさんいました。アブドル・バハのお父さんであるバハオラもその一人でした。バハオラは牢屋に入れられて、残された家族もいじめられていました。バビ教徒の子どもは、他の子どもにいじめられるといった具合にね。アブドル・バハも同じような目にあつたのよ。それでも怒ったりしないこと、迫害を通して神様の偉大な力が現れると、バハオラはアブドル・バハに諭されました。木は雨に打たれても水の恵みを受け、太陽に照らされても光の恵みを受けているようにね。だからこの事件は葉っぱにちよつとした埃が付いたぐらいのことでしかなく、害にはならないのよ。アブドル・バハもそれをよく分かつていたの。困難に立ち向かえば、私たちは精神的に強くなり忍耐強くなって、意地悪する人にも優しく愛することができるようになるのよね。アブドル・バハは、いつも誰にでもそうされたのよ。」シャラが、「そう言えば、40年近くアブドル・バハに会うたびに彼に唾を吐きかける男がいたけど、アブドル・バハはその男に優しく親切にして、ついにはその人と友だちになつたのよね。どんな人でも私達と同じように神様が創られたと思えば、へっちゃらだもんね。」と付け加えました。

「アブドル・バハが子どもの頃の話を、もっと他にある？お母さん？」とアスマが聞きました。すでに自分に起こつたことは忘れてしまったようです。

「アブドル・バハは、まだ幼い少年のときに、バハオラが新時代の神の顕示者であることを知らされていたのよ。アブドル・バハは、その頃からバハオラの聖なる書簡を読み、暗記するのが大好きだったの。馬に乗ることも好きだったんだって。それでバクダットに住んでいる頃、馬に乗って狩りの一行に加わつたけどその一行が罪のない鳥やけものを銃で撃つたり殺したりするのを見て、ご自分の生涯は鳥やけものを追うのではなく、人の魂だけを追いかけて、その魂を神の道に導くことに決めたそうよ。」

「その気持ち分かるよ！」とアスマが言って、「鳥やけものを殺して、その肉を食べるなんて大嫌い！」と声を上げました。するとリアズが笑いながら、「ご免、アスマ。おれは肉を食べないと死んじゃう！野菜なんて大嫌い！」と言いました。お母さんが続けて、

「アブドル・バハは子どものときからバハイの先生としても素晴らしかったのよ。ある日一人のバハイが、高い教育を受けた弟を、ほんの子どもだったアブドル・バハに紹介しました。アブドル・バハは、その弟に神が新しく人類に送られた偉大な教育者と、その教えについて説明しました。でも、その人は説明に満足せず納得しませんでした。そこで、アブドル・バハはその人に言いました。『のどが渴いている人に水をあげたら、それを飲ん

で満足する筈です。でも、今のあなたはどが渴いてはいないようです。だから満足しないのです。』 アブドル・バハがさらに続けて『ちゃんと目を開けている人に太陽が出てきていることを言えば、太陽を見て納得するでしょう。でも、目を閉じている人にくら言っても、納得しないでしょう。耳がよく聞こえる人に美しい音楽を聴かせれば、喜んでくれるでしょう。でも、耳を塞いでいる人にどんなに美しい音楽を流しても、感動しないでしょう。あなたが見る目と聴く耳を持つようになったら、私はもっと神のメッセージの続きがお話できるのです。』とおっしゃると、その男はそれを聞いて去って行ったけど、すぐまた戻って来て、強いバハイになったそうよ。」

「アブドル・バハは、やっぱりすごいなあ！」みんな感激して声を上げました。

「私たちのように子どもでも教えを広めることができるのよね。」と末っ子のアニサが興奮して、跳びはねながら言いました。そこでモナが、「教えを広めると言えば、私と同じモナという若い女の子と、アブドル・バハの話を知っているわ。話していい？」と言ったので、みんな、オッケーの合図をしました。

「アブドル・バハは、かなり年とったとき、ヨーロッパとアメリカを訪問されました。その旅の途中で、モナという若い女の子に出会いました。アブドル・バハは、その子を抱き寄せ、両ほほにキスしました。そして、イギリス人なのかフランス人なのか聞きました。女の子は、とてもはずかしがり屋で返事をしませんでした。そこで、アブドル・バハは、今度誰かに同じように聞かれたら、バハイと答えられるようになりなさいと言いました。それから、その子にバハオラの羊の世話をしている男の話をして聞かせました。『その羊かいは、素朴な田舎の人で読み書きもできない人でした。近所の人からユダヤ教徒かキリスト教徒か、それともイスラム教徒なのかと聞かれて、意味が分からず、バハオラの羊かいだと答えるだけでした。』アブドル・バハは話終わると、『私の可愛い娘よ。』と呼んで、モナの頭をなでられました。おわり。」そこでお母さんが、「このお話を、みんなはどう思う？」と聞きました。モナがすかさず応えて言いました。「この話は、国籍がどこかは問題ではないということだと思うわ。私たちは混血のハーフと呼ばれているけど、国籍は二つだからダブルだもんね。大事なことは私たちが神の教えに従って人間らしくしているかどうかよね。。。ちがうかな？」

「すごい、モナ！」お母さんが驚いて言いました。「さしずめ、あんたもアブドル・バハの娘と言ってもいいわね！」子どもたちはどっと笑いました。

「お母さん。」とアニサが突然、思い出したように言いました。「昨日みんなが学校に行っているときお母さんがしてくれた、アブドル・バハと動物園のお話、面白かったから、その話をして！」他の子たちは驚きました、そんな話は初耳だったからです。

「それは1912年頃、アブドル・バハがアメリカに渡ったときのことだったの。シカゴでアブドル・バハは動物園に行きたいと言われました。バハイの友らは春なので、動物の母親が生まれたばかりの赤ちゃんを隠そうとして姿を現さないといいました。それでもア



ブドル・バハは行くことを強く希望されました。檻の前に来ると、バハの友らにご自分の後ろに隠れるように言いました。アブドル・バハが檻に近づくと、何と動物の母親は赤ちゃんを見せようとして出てきました。しかし、バハの友らが檻に近づこうとすると決まって動物の親子は急いで隠れてしまいました。」



「なるほど、バハオラもだけどアブドル・バハが動物好きなのを動物も分かるんだろうよ。」とアスマが納得して、さらに続けました。

「思い出したぞ、誰かがハエやカは害になる生き物かどうかアブドル・バハに聞いた話。アブドル・バハの答えは、人間が良いことをするのと同じように、ハエやカだって良いことをする。たしかにカは人間の血を吸うような悪さをするが、人間は動物を殺して食べるではないか。このように人間の方がカよりもひどいことをするではないか、って言われたんだ。」そう言って、いつも生き物を可愛がるアスマはにっこりしました。他の子たちも同感して手を叩きました。アスマは自分に起きた災難をもうすっかり忘れたようでした。

「アスマ、バハイ子どもクラスで習った、アブドル・バハの引用文、憶えている？ほら、ただ地面を這っているだけの毒へびなら、傷つけないようにする話よ。」アスマが、その引用文を復唱しました。

たとえ毒へびが地面に這っているのを見つけても、必要なければ、傷つけてはいけ
ない。ましてや人間だったら、なおさらである。同じように必要なければ、アリを見つけても脅
してはいけ
ない。ましてや自分と同じ人間だったら、なおさらである。

「わあー、すごい！アスマ！」子どもたちが感心して叫びました。

「みんなでアスマのように、この引用文を憶えようよ！」とシャラが言いました。

「みんなアブドル・バハのように誰にでも優しくしようよ！」とアニサが跳びはねながら、手を叩いて言いました。

「それでは」とお母さんが言って、「みんなも、アスマを傷つけた少年たちにも優しくすることね。それから、リアズ、今回の問題をどうやって解決したらいいと思う？」

「そうだなあ。。。まず、おれがいじめた奴にあやまって友だちになってやるかなあ。それから、アスマをいじめた奴らに、おれとアスマとを間違えたんだと言ってやるかなあ。」

「わあー、リアズ、勇気あるなあー！」とアスマが感心して言いました。

「ねえー、それじゃ、明日その男の子たちにリアズが殴られないように、みんなでお祈りしようよ。」とモナが提案しました。みんな自分のお祈りの本を取って、リアズのために一人一人順番にお祈りをしました。

次の日、リアズが明るい表情で家に帰って来ました。お母さんと他の子たちは話していたのを止めて、リアズの方に目を注ぎました。リアズが口を開いて、



「やったぜ！例の奴にあやまったんだ。そいつが、間違いをした兄きにおれを引き合わせ
たんだ。ちょっとひやっとしたけど、でも、その兄きは間違いを知ってアスマに悪いと言っ
てたよ。」ちょうどそのとき、アスマがリアズに続いて明るい笑みを浮かべて家に帰って来
ました。そして報告しました。「その兄きと仲間が昼休みにおれのところに来て、昨日のこ
とは悪かったとあやまったんだ。そして、いっしょにサッカーをしようとおれを誘ったん
だ。」

「ほら、ごらん！」とお母さんが言って、「葉っぱの埃ぐらいでは害なんかにはならないで
しょ！それにしても、この事件はバハイ・ジュニア・ユースが学んでいる『確証』で締め
くくられたようね！」

「確証って、何なの？」とアニサが不思議そうに聞きました。

そのとき、ちょうど帰って来た、お父さんがそれに答えました。

「確証とはだな、自分が固く信じていたことが、正しかったのが明らかになったというこ
とだ。」

「お帰り！お父さん！それにしても、リアズがアブドル・バハのお手本にならって確証を
得たおかげで、お母さんはホッとしたわ。」「それもこれも、アブドル・バハのお手本があ
ったからこそだね。」アスマが付け加えました。

「やったー！アブドル・バハ、ばんざーい！」とアニサがうれしそうに叫びました。他の
きょうだいたちも笑いながら、「やったー！アブドル・バハ、ばんざーい！」と叫びました。
まるで、ヤー、バハオラ・アブハー、ばんざーい、とも聞こえるその叫びは、辺りにこだ
まして響き渡っていきました。



クイズ

1. 校門を出たところでアスマに何が起きましたか？

2. 男の子たちがアスマをおそったのは何故ですか？

3. アブドル・バハが子どものとき、いじめられたのを家族は怒りましたか？そのとき、家族は何と言いましたか？

4. アブドル・バハは狩りをするのが好きでしたか？それは何故ですか？

5. 新しい神の顕示者についての説明に満足しなかった男の人に、アブドル・バハは何と言いましたか？

6. アブドル・バハはモナという女の子に、誰かが国籍を聞いたら、何と答えるように言いましたか？

7. バハオラの羊かいは何の信者かと聞かれたら、何と答えましたか？

8. アブドル・バハがアメリカで動物園に行ったとき、何が起きましたか？

9. 誰かが、害になる生き物について聞いたとき、アブドル・バハは何と答えましたか？

10. リアズは男の子たちにおそわれましたか？結局、最後にはどうなりましたか？

上の質問にいくつ答えられましたか？ 答は保護者のページにあります。



ぬりえ



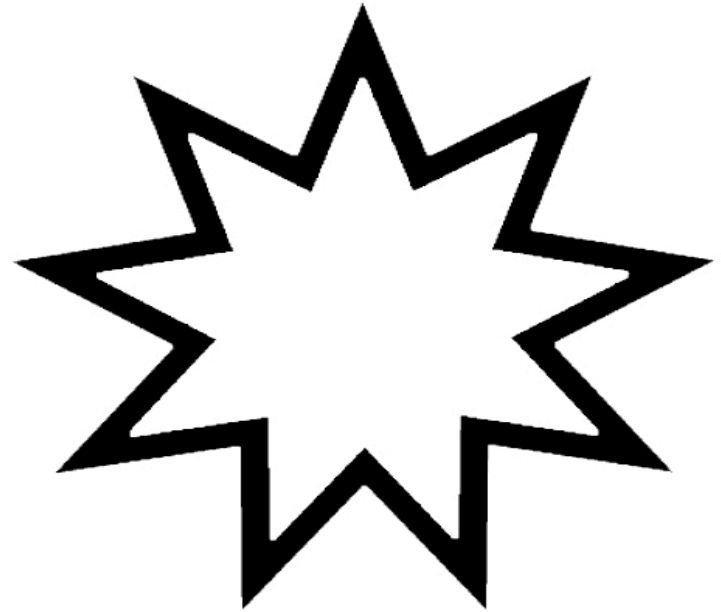
スタンドグラスの星の作り方

ざいりょう 材料

- 黒い輪郭の星 (右図)
- はさみ
- 透明のプラスチック (惣菜とか
刺身などのプラスチックの空き箱)
- 色付きのティッシュペーパー
- のり、テープ
- カッター

つく 作り方

- 右上の星を印刷して、はさみとカッターで黒の輪郭を切り取る
または、その輪郭を黒の模造紙に写し、切り取る
- プラスチックに星の輪郭をのり付けする
- 裏側にいろいろな色のティッシュをのり付けする
- スタンドグラスになった星を切り取る
- スタンドグラスの星をテープでガラス窓に貼りつけて飾る





Children's Class from 2014



保護者のページ

神の言葉を発するバハオラは、アブドル・バハのことをご自分のご子息でありながら「マスター（師）」と呼ばれ、まわりのみんなにもそう呼ぶように言われました。

次のバハオラの言葉はアブドル・バハの地位を如実に表わしています。

「定められた時期に、万物の創造主である神は、聖霊（全能）の力を備えた人をこの世に送るのである。。。。イエス・キリストはこの力を持っている。。。。。今は、師（アブドル・バハ）を見よ。師にもその力があるのである。」

「いつも師の言うことを聞きなさい。師の言葉は私の言葉である。私の言う言葉は師の言葉である。」（大樹の泉 P.134, 135）

このように、バハオラはアブドル・バハをご自分が発する神の言葉の解釈者、新時代に人類が和合する教えのお手本として公言されました。そのアブドル・バハが、人類が和合する第一歩として、人類みんなに次のような課題を投げかけておられます。これらの課題を言葉だけでなく実行するには具体的にどうしたらいいか、家族みんなで話し合っ

1 人に殴られても、その人と友だちになる努力をなさい。

2 刺^{とげ}のある人には草花とバラの花になりなさい。

3 馬鹿にされたり、いじめられたりしても、愛を持ってその相手とつき合いなさい。

4 見知らぬ人を身内のように世話しなさい。

5 とことん攻められても、相手の長所を称えなさい。

（大樹の泉 P.196 197）

クイズの答え：

1) アスマより大きい^男の子たちがいきなり跳びかかって来て、蹴ったり叩いたりした。

2) ^弟がいじめられた^{仕返し}。

3) いいえ、^{追害}で神の偉大な^男が現れるんだ。

4) いいえ、罪のない生き物を殺すのが嫌だった。

5) のどが渇いていない^人に^水をあげても満足しない。今のあなたはのどが渇いていないから満足しない。あなたが聴く^耳と見る^目を持つようになったら、もっと説明の続きができる。

6) バハイと答えられるように。

7) バハオラの^筆かい。 8) アブドル・バハには。動物たちは姿を^現し、^他の^人たちからは隠れてしまった。 9) ^他の生き物より^人間の^男が殺し合ったりするので、害になる。

10) いいえ、お互いにあやまって仲直りした。



№ 265
2016年3月発行
バハ 273

以下のリンクにアクセスすると「ひるの星」をカラー印刷することができます。

<http://hirunohoshi.weebly.com/>

日本バハイ全国精神行政会

〒160-0022 東京都新宿区新宿7丁目2番13号

電話：03-3209-7521 FAX：03-3204-0773

ひるの星委員会：グレン・ロウ、バウデンカービー真己、平原静志、平原ルアナ

物語：平原ルアナ

和訳：平原静志

ぬり絵

写真：ウィキペディア、平原ルアナ、イヴァ・尊田、グレン・ロウ

さし絵：平本かおり、スティーヴ・パスカル、グレン・ロウ

テクニカルアドバイザー：グレン・ロウ

監修：野口メアリー